

成人男子の異所性尿管瘤の1例

中部労災病院泌尿器科

小谷 俊一・小林 峰生

名古屋大学医学部泌尿器科学教室

近藤 厚生・瀧田 徹・加藤久美子

ECTOPIC URETEROCELE OF ADULT MALE

Toshikazu OTANI and Mineo KOBAYASHI

From the Department of Urology, Chubu Rosai Hospital

Atsuo KONDO, Thoru TAKITA and Kumico KATO

From the Department of Urology, School of Medicine, Nagoya University

A case of ectopic ureterocele in a 50-year-old male is reported. He was admitted to the hospital with complaints of miction pain, cloudy urine and fever attack. He had had pain at voiding from time to time during the past 10 years. The prostata was swollen, edematous and tender. Cystoscopy revealed a large bulge in the left trigone to bladder neck, and two ureteral orifices in the right, but none in the left. Complete duplication of the right ureter, lateral deviation of left ureter, and bladder deviation to the right were detected on the drip infusion pyelogram.

An ectopic ureteral opening was present in the posterior urethra. A 5 Fr ureteral catheter inserted into this orifice revealed a dilated & tortuous left ureter which belonged to the left upper half kidney. No communication between the ureter & seminal vesicle was revealed by seminal vesiculography.

Ureterectomy from left upper half kidney and resection of ureterocele were performed together with ureterovesicoanastomosis to drain urine from the left lower half of kidney.

Key words: Ectopic ureterocele, Adult male, Opening in urethra, Complte duplication

小児泌尿器科の進歩にともない、近年本邦でも異所性尿管瘤（ectopic ureterocele）の報告が増加しているが、その大半は小児であり、成人例の報告は少ない。最近われわれは50歳男性の異所性尿管瘤を経験したので報告する。

症 例

患者：50歳，男

初 診：1983年5月16日

主 訴：排尿痛，尿混濁，発熱

家族歴：特記事項なし

既往歴：生下時8カ月の未熟児であった。30歳で結婚

その後11年間実子に恵まれなかった。この間、某産科で精液検査の結果、精子数が少ないといわれ、AIHを施行したが不成功。しかし42歳時、自然に妊娠に成功し、現在は2人の子がある。1983年4月28日左ソケイヘルニア根治術を受けた。

現病歴：10年前より2～3カ月に1回、焼けつくような排尿痛があり、とくに飲酒、性交後に痛みが強かったが、放置していた。1983年5月15日、排尿痛とともに尿の混濁、高熱が出たため、近医受診し、翌日当科へ紹介され入院となった。

入院時現症：身長157cm、体重69kg、左ソケイ部に手術痕あり。直腸診で、前立腺は両葉ともにブヨブ

ヨした感じで浮腫状に腫大し、とくに中央で圧痛著明であった。

入院時一般検査：末梢血検査；白血球 $13,500/\text{mm}^3$ ，赤血球 $485 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，血色素 14.3 g/dl ，ヘマトクリット 42.0% 。血液生化学；BUN 11.3 mg/dl ，クレアチニン 0.99 mg/dl ，Na 136 mEq/l ，K 4.2 mEq/l ，Cl 103 mEq/l ，総蛋白 6.9 g/dl ，総ビリルビン 1.3 mg/dl ，LAP 77 mu/ml ，Al-P 92 mu/ml ，GPT 80 mu/ml ，GOT 51 mu/ml 。尿検査；pH 5，蛋白（+）糖（-），混濁（++），赤血球 5~6/F，白血球多数/F。尿培養にて生菌数 $10^4/\text{ml}$ ，staphylococcus epidermidis が検出。

膀胱鏡検査：右側に2個の尿管口を認める。しかし左側は膀胱頸部より三角部にかけて膀胱粘膜が著明に膨隆し、左側尿管口は不明であった。

X線検査：KUB は異常がないが，DIP にて右側の完全重複腎盂尿管を認めた。左側の腎盂尿管は単一で，その尿管が中部でかなり屈曲しているように見えた。膀胱像はいちじるしく右方へ偏位していた（Fig. 1）。膀胱尿道造影で，左側に直径 55 mm の半月状の陰影欠損を認め，膀胱は右側前方へ圧迫されている（Fig. 2）。骨盤 CT では膀胱の左側に大きな占拠性病変を認めた。以上より異所性尿管瘤または尿管の精囊腺への異所開口が疑われ，より正確な診断を下すため，1983年6月7日，尿道鏡および両側の精囊腺造影

を施行。尿道鏡の観察により膀胱頸部より少し遠位部の後部尿道（5時の位置）に異所開口部と思われる穴が確認され（Fig. 3），この穴より間欠的に膿汁が噴出する状態が観察された。この穴に5Fr尿管カテー



Fig. 2. Urethrocytography showed bladder deviation to the right.

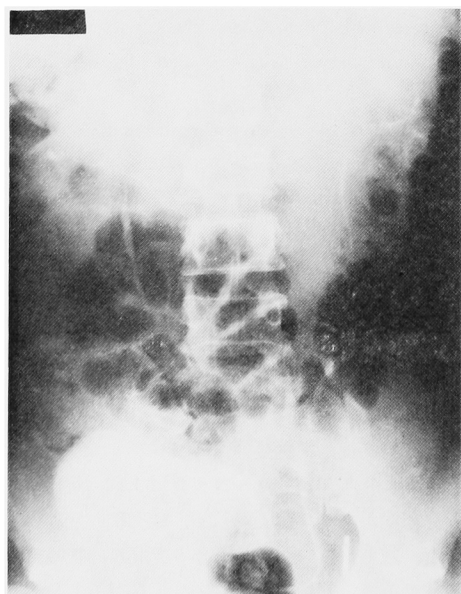


Fig. 1. Pre-operative DIP showed right complete pelvis & ureter lateral displacement of left ureter and bladder deviation to the right.

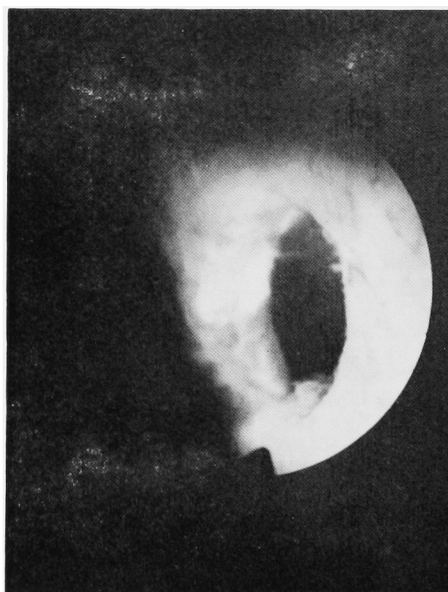


Fig. 3. Urethroscopy showed ectopic ureteral opening in posterior urethra.

テルを挿入すると、25 cm スムースに挿入可能であった。引き続き両側の精嚢腺造影を施行。尿管カテーテルよりウログラフィン 90 ml を注入して逆行性造影すると、尿道膀胱造影の陰影欠損に一致して、膀胱部に大きな腔が存在し、この上方は太く拡張屈曲した尿管が続き、その先端は二又になって途絶していた (Fig. 4)。精嚢腺像は縦長で左方へやや偏位し、尿管との連絡は認められなかった (Fig. 4)。以上の所見から、左上半腎よりの尿管が後部尿道に開口し、その末端部が嚢状に拡張した異所性尿管瘤と診断し、1983年6月14日全麻下にて手術を施行した。

手術所見・まず腰部斜切開で後腹膜腔にはいると、著明に拡張、屈曲した尿管を認め、これを腎臓側へ剝離すると、その先端は左腎上極に終わっていた。しかし左腎上極部は中、下極部と同じ色調、外観で萎縮性変化はなかった。上極付着部で尿管を切断、腎臓側は直径 3 mm 位の小さな腎杯状の腔が存在したためこれを縫縮閉鎖した。この後、拡張尿管を膀胱側へ剝離したが、炎症性癒着が強く、左下半腎よりの正常な太さの姉妹尿管 (twin ureter) を誤って切断したため、切断部での尿管の端々吻合を施行し、同時に腎瘻を造設した。体位を仰臥位に変換し、斜切開の創を下腹部横切開へと延長し、先の拡張尿管と姉妹尿管を膀胱側へ剝離した。膀胱近傍部では2本の尿管は common sheath に包まれていたため、この直上で2本の尿管を切断した。ついで膀胱高位切開すると、術前診断の通り、膀胱内左側に鶏卵大に膨隆した尿管瘤が存在し、このもっとも頭側の位置に下半腎につながる尿管の開口部が認められた。尿管瘤を前壁、後壁を含めてできるだけ遠位部まで切除した後、下半腎所属尿管を Paquin 法に準じて新吻合し、膀胱壁を閉鎖縫合した。尿管瘤の切除に際し、膀胱頸部から後部尿道にかけての部分は十分な直視下に入らず、さらにこの部の無理な切除は術後の尿失禁や尿漏の原因となるため、施行しなかった。手術所見から確認した本症例の尿路系のシェーマを Fig. 5 に示した。術後経過は良好で、2カ月目に退院した。術後の排尿時膀胱尿道造影で、膀胱頸部付近に残存瘤の一部と思われる 4.0×1.5 cm の造影剤の貯留像が認められるが、排尿は残尿を残すことなく完遂され、自覚的には軽い排尿痛のみで排尿は円滑である。また、尿所見も異常を認めない。

考 察

異所性尿管瘤の定義として現在明確なものはないが、Tanagho¹⁾ のいう「膀胱頸部ないし後部尿道に開口する尿管末端の嚢状拡張」が一般的である。本邦

では島田ら²⁾ が1981年末までに51例を集計している。われわれはその後1983年末までに文献上24例³⁻⁹⁾を追加集計し、自験例は本邦76例目となる。異所性尿管瘤は一般には女兒の完全重複尿管の上半腎所属尿管に発生することが多いが、本邦76例でも15歳以下の女兒が実に59名(78%)を占めていた。自験例のような成人男性で発見された例は6名(8%)に過ぎず、比較的まれな例といえる。自験例の場合、なんらかの誘因で尿

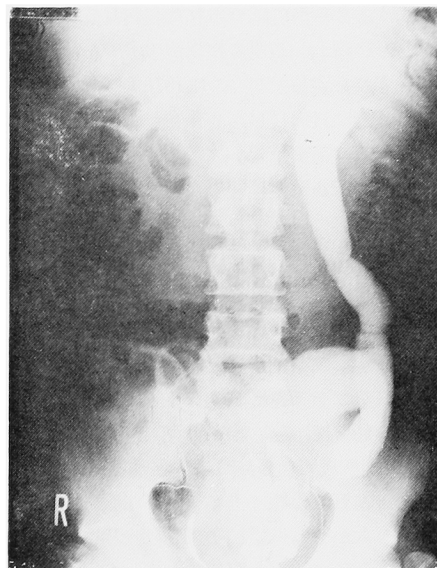


Fig. 4. Retrograde pyelography revealed a dilated & tortuous left ureter which belonged to the left upper half of kidney.

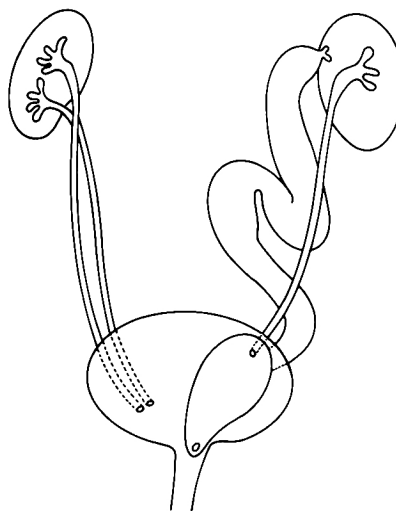


Fig. 5. Schematic representation of urinary tract.

管瘤内の感染が増強し、瘤内の感染した膿が、後部尿道の異所開口部へ流出し、尿の混濁、発熱をひきおこしたものである。

本疾患を積極的に発見するうえでもっとも有用な手段は排泄性尿路造影である¹⁰⁾。(1)膀胱底の円形陰影欠損(2)下半腎腎盂腎杯の外側下方偏位(drooping lily)(3)腎陰影の上縁と下半腎腎杯の距離が異常に長い(rim sign)(4)姉妹尿管のlateral displacementなどが異所性尿管瘤を示唆する重要なサインであり、自験例でも(1)と(4)はあきらかに認められた。内視鏡検査は尿管瘤開口部の診断上、必須の検査法であるが、開口部の確認は必ずしも容易でなく、本邦76例中でも開口部不明とした症例は11例(14%)存在した。自験例では尿道鏡にて瘤開口部を確認し、ここより尿管カテーテルを挿入して瘤所屬腎盂尿管の逆行性撮影に成功した。尿管の精囊腺への異所開口を検討するためには精囊腺造影が必要である。Fig. 4はこれら2つの検査を同時に施行したもので、本症の確定診断と手術術式の選択にきわめて有用であった。

本症の治療に際し、瘤所屬上半腎の機能が排泄性尿路造影や腎シンチで廃絶していると判明した場合、上半腎部分切除術が必要である。自験例では、術前のDIPでは瘤所屬腎盂腎杯は描出されなかったが、術中所見で、左腎の外観は上半腎、下半腎ともに正常の実質であり、かつ瘤所屬拡張尿管は上極に付着し、その内腔はきわめて小さな腎杯状であった。このため、尿管切断後、この小さな内腔を縫縮閉鎖するだけで十分であり、半腎切除術は不要であった。術中の姉妹尿管の損傷は本疾患の手術上、留意すべき点のひとつであるが、自験例では癒着が強く、不本意にも姉妹尿管を切断し、尿管端々吻合を余儀なくされ、深く反省すべき点であった。最後に尿管瘤の切除法については議論の多い点であるが、自験例では術後の膀胱尿道造影で膀胱頸部の残存瘤を認めており、今後も排尿状態を厳重に観察していく予定である。

結 語

50歳男性にみられた異所性尿管瘤の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) Tanagho EA: Anatomy and management of ureteroceles. J Urol **107**: 729~736, 1972
- 2) 島田憲次・薮元秀典・森 義則・生駒文彦: 異所性尿管瘤——本邦報告例の統計を含む——. 日泌尿会誌 **74**: 1003~1014, 1983
- 3) 原田吉憲: 新生児異所性尿管瘤の一例. 日本小児外会誌 **17**: 920, 1981
- 4) 新井健男・高橋 剛: Ectopic ureterocele の4例と本邦報告例の文献的検討. 日本小児外会誌 **17**: 705~717, 1981
- 5) 有吉 忍・谷口 繁・寺井泰彦・細谷邦明・久保隆・俵 修嗣・安達雅史・榊原敏文・渡辺秀幸: 異所性尿管瘤の2症例. 小児科診療 **45**: 949~952, 1982
- 6) 棚田敏文・永友和之・新川 徹・斉藤 康・長田幸夫・石川靖之: 異所性尿管瘤の2例. 西日泌尿 **44**: 303~307, 1982
- 7) 谷風三郎・木野田 茂: 小児異所性尿管瘤の診断、治療と予後について. 日泌尿会誌 **74**: 2005, 1983
- 8) 石川博通・武島 仁・相川 厚・小川由英: 両側異所性尿管瘤、完全重複尿管の1治験例. 臨泌 **37**: 915~918, 1983
- 9) 寺地敏郎・大森孝平・町田修三・瀧 洋二・林 正: 成人女子尿管瘤の2例. 泌尿紀要 **29**: 1075~1078, 1983
- 10) 折笠精一・山田智二・平野哲夫: Ectopic Ureterocele (異所性尿管瘤) による排尿困難症例. 西日泌尿 **33**: 579~585, 1971

(1984年3月29日受付)